会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

コロナ禍に想う

上川北部医師会
士別市立病院
長島（ながしま）　仁（ひとし）

士別市立病院は一昨年まで７年連続で黒字を計上した。大げさに言うと開院以来60年ほど続いた赤字体質から７年連続黒字を計上したとも言える。まさに“崖っぷち”からの脱出が図れてきていると考えている。また黒字を計上しているだけでなく、士別市から毎年いただく繰入金（補助金）も５億円ほど減らしてきており、士別市の財政に非常に良い影響を与えており、大変に感謝をされている。

それが昨年度（2022年度）、とうとう８年ぶりに赤字を計上してしまった。その原因は新型コロナと関係があることは間違いない。昨年度に当院はコロナ禍が始まって以来初めて、院内クラスターを経験した。それも４度もだ（①８/21～９/８に患者22名、職員５名②11/２～11/13患者７名、職員２名、③１/26～２/26患者23名、職員10名、④３/７～４/２患者25名、職員５名）。そして本当につらいのは院内クラスターが収まっても入院数が完全には元に戻ってこないことだ。そのために入院患者数が減ってしまい、とうとう赤字を計上したということである。

私にとっては院長になって初めて経験する赤字であり、かなり深く落ち込んだ。事務幹部たちは、仕方がないことだから気にするな、と慰めを言ってくれるが私にとっては大きな衝撃だ。

コロナの影響は私にとってはそのように悪いものが多いが、良かったと思うこともある。コロナ禍が始まった当初、職員たちはできればコロナの入院を受けなくて済むのなら、受けない方がよいと言う雰囲気だったが、広い士別市に１か所しかない病院として、コロナに感染し、入院せざるを得なくなった市民をとにかく頑張って診療しようという雰囲気に徐々に変わっていったのだ。

考えてみると、私が士別市立病院に副院長として着任した12年前に、業務内容についての苦情ばかりが看護部から上がってくるような傾向があり、私はその当時の看護部長に「あなたたち看護集団の顔はどっちを向いている？　患者さんたちの方に向いているか？　業務内容の方に向いているのではないか？」と大変失礼なことを言ったことを覚えている。あの頃と比べてみると経営改善のための病棟再編、運営方針の転換を彼らは経験し、ともに苦労する中で、集団としての意識がかなり変わってきたと思う。患者・市民のために私たちは医療を行うという意識が強くなってきたと感じる。そして今回のコロナ禍はその意識をさらに強固なものとしてくれているように思う。

話は少し変わるがその当時の看護部長とは、何度も大喧嘩をしてきた。彼女は看護師たちを守るためにいるわけだから、より少ない看護師数でより多くの仕事をこなしてくれと頼む私と仲良くやれるはずはない。しかし、今振り返って、頻回に行った病棟再編が何とかうまくいってきたのは、やはり看護部長をはじめとする看護部の職員の力が大きいと考えている。やはり感謝をしているし、今後も看護部に頑張っていただかねばとも思っている。

前述のように院内クラスターが発生するようになってからは、入院せざるを得なくなった市民をとにかく頑張って診療しようという意識がさらに強まり、最終的には普段、緊急入院をあまり受けない療養病棟でも陰圧キットを取り付けて、コロナ患者の診療をしてくれた。たくさんの職員がコロナ陽性になったり、濃厚接触者になったりして、職場の人員確保が大変になった時期がかなりあったが、職員たちはとんでもなくたくさんの苦労を抱えてくれた。本当にありがたく、頭が下がるばかりだ。

コロナ禍になって飲み会などの仕事以外で職員たちが交流する場が殆どなくなってしまい、ガス抜きや意思統一の機会が非常に少なくなってしまったが、皆でなんとか乗り越えようという意識はコロナ前にはなかったレベルまで高まっていると思う。それはコロナ禍になって当院が獲得したものの一つである。また、コロナ禍の影響で必要看護師数の確保が困難となり、昨年度末に２つある慢性期病棟のうちの１つを休止にした。そして、かなりの数の職員の働く部署が変わったが、たくさんの職員が今までと違う部署で違う同僚と働くこととなり、その新鮮さの影響もあり、職員たちの「ともに頑張ろう」という共感がさらに強まってきている気がする。職員たちは、まさに苦労を通して集団としての能力を高めてきたのだと思う。

そのように考えてくると、私はコロナ禍の影響を経営的に悪い面でばかり考えるのでなく、職員たちそして病院全体に与えた良い面もきちんと捉えるようにしなければならないと思う。転んでただ立ち上がるのでなく“石”を拾って立ち上がろう、それも“価値のある石”を拾って立ち上がろう、そんなことをこの酷暑の夏に考えている。

ニューヨーク小旅行

札幌市医師会
市立札幌病院
清水（しみず）　聡子（さとこ）

新型コロナが５類に移行したので、ニューヨーク（New York、NY）へ長男と１週間の個人旅行に行きました。旅行好きで海外には60回以上行っている私ですが、なぜか世界の中心NYは未知の世界でした。現地のコロナ事情は心配でしたが、行けるときに行かないと次に何が起きるかわからないと決断し、同僚も快く送り出してくれました。

NYでは観光名所巡りのほか、本場のゴスペル（礼拝音楽）を絶対に体験したかったので、教会の日曜礼拝に参加させてもらいました。手拍子を打ちながら礼拝を盛り上げる熱狂的な音楽（praise song）に続き、ジョークも交えた小スピーチを挟んで、参加者が手を挙げて神を讃えて歌うworship song、牧師の説教、と続きます。聴いているだけでも楽しいのですが、曲はシンプルで繰り返しが多く、不思議と口ずさめる曲もありました。途中、「隣の人と握手しましょう」という声かけがあり、隣に座った黒人のおばあさんとの握手は、自然と心温まる瞬間でした。また、予約して訪れたジャズクラブは、隣の人と肩が触れるほどの混雑ぶりで、本場のジャズに加え、音楽を好むもの同士として、現地の方とのおしゃべりも弾み、忘れられない夜となりました。知る人ぞ知る前衛の体験型演劇“Sleep no more”では、５階建ての劇場全体が舞台となり、俳優を追って各階を移動しながら、無言劇とコンテンポラリーダンスを至近距離で楽しみました。１日ツアーで行ったペンシルバニアではアーミッシュ（特殊な教義に従い、18世紀移民当時の生活様式を守り、いまだに電気を使わず生活している宗教集団）の村を訪れ、深く知ることができたのも得がたい体験でした。

一方、繁華街のあちこちに漂う大麻の独特な香り、至る所に寝転がるホームレス、地下鉄の尿臭、幹線道路の中央に立つ麻薬中毒者の姿など、アメリカの陰鬱な一面が垣間見え、それが豪華絢爛なトランプタワーなどと対照をなしている光景は、アメリカの多様な側面が狭いマンハッタン島に凝縮されているように感じました。

刺激的な１週間でしたが、特ににおいの記憶は印象的で、オンラインでは決してえられない経験でした。摩訶不思議なNYをもっと知りたい、という気持ちでいっぱいですが、円安とNYの物価高が重なり、節約したのに予想外に高額な滞在費になってしまったので、当面再訪は難しいでしょう・・・。

母を看取る

北広島医師会
北海道北広島西高等学校
戸田（とだ）　博豊（ひろたか）

歩けなくなったので車椅子、老人ホームで看てもらっていた。

妹から電話「お母さん、もう食べなくなったので、入院点滴させてください、とホームの人が言っている」

「やめておけ、放っとけ、もうあの世に行くつもりなのだから」

早く帰らなきゃと思いつつ２週間程経った。

もう帰らないと！

間に合った。

唯、息をしているだけ。

今晩一晩もってくれ！明日連れ帰るから。

ありがたい。もってくれた。

家で寝かしたが、まだ下顎呼吸になっていないので妹を自宅に帰した。

その晩、私は酒を飲んで母の傍らで眠っていた。

長男が「お婆さん、息してないよ！」と。

９時頃だった。主治医に連絡して診てもらった。診断書は、餓死でもない、老衰でもない。

過去の病歴から探し出してきた病名になっていた。点滴していなかったので、足の浮腫みもすっかり取れていた。

90歳。42回目の人生だった。地球ではベテラン。

破産して夜逃げもしたが、母はへっちゃらだった。大阪は田舎と違って働く所は幾らでもある。

生きて行き易い、と言っていた。

保険の外交員をして４人の子供を育てた。当時、貧乏であっても金が無くても国は大学まで卒業させてくれた。ありがたかった。

私がブラブラしていたとき、母は霊能者の所に聞きに行った。

「この子は一体何になるのでしょう？」「放っとけ！この子は自分で絵を画いていく」

その後、私が医者になってから話してくれた。弟が三浪でもう後がないときにも聞きに行った。

「ここの大学だけにしておけ。他は受けることならん」

通った。国立旧二期校。

その霊能者が亡くなった後にもまた、霊能者を探してきた。

他人の思っていることが分かる坊さんだった。心を見透かされるのでゾッとした。

私はまだ３回目の人生。地球ではまだペーペーだ。

まだ地球の生活には慣れてはいないので、学校には行きたくなかった。

他人付き合いは厭で苦労してきた。今でいう発達障害。

周りを見たら、そういう子は結構多くいる。それを無理矢理学校に行かせようとするから不幸なことが起こる。

親殺し。子殺し。

「身を立て　名をあげ　やよ励めよ」と、この世では活躍している人たちは皆、20回以上の転生を繰り返している。

一般に肉体が死んだら、あの世で30、40年は過ごすのが普通だが、母はもう７回忌の前に生まれ変わっている。

何かやるべきことがあるのだろう。後、９回程転生する、と。

スズメバチ（後編）

深川医師会
深川市立病院
代田（だいた）　剛（ごう）

決行、戦闘開始を８月４日午後８時と決めた。幸いというかその日は雨模様で、夜のとばりは早めに下りた。漆黒の闇の中での戦闘ならスズメバチの反撃も少ないだろう、と期待したが、なんせ住宅地なのであちらこちらから光は漏れ届いている。防護服を着るのに少し手間取った。それはキャップを被ったとき、頭の大きさを調節する部分が小さすぎて私の頭に合わないのである。高校入学時に既製では合わず、オーダーの学生帽でなくては入らなかった頭の大きさなのだから。それから顔を通そうとすると首の部分が狭いので眼鏡が落ちてしまうのである。これはこの部分のチャックを緩めてうまくいった。予行演習をしておけば良かったと思った。戦国武将として鎧兜を戦闘に出る直前に初めて着けるのはあり得ないことで、戦国武将として失格であるのを悟った。何とか全身を防護服、厚い手袋、長靴で身を固め、右手にマグナムジェットプロを、左手に懐中電灯を持ち巣の前に立った。マグナム缶に印刷されている使用方法は、風上のまず３ｍ程離れた所から噴射を始め、そのまま近づき１ｍ程の所から噴射を続けるとある。これでは私は生ぬるいと判断し、市の係員から教わった１cmにならなくても、出来るだけ巣の出入り口に射出口近づけ発射することにした。マグナムの射出時間は最長45秒である。その時間で勝負をつけなくてはならない。懐中電灯を向けると予想に反してスズメバチが出入り口から出てくるのである。午後８時を回ってもスズメバチの就寝時間とはなっていないようである。やっぱり手ごわい相手である。懐中電灯を消し、そっと出入り口から数センチメートルと思われるところまで射出口を近づけマグナムを発射することにした。１cmまで近づけたかったが暗い中で射出口を巣に当て振動を与えては元も子もないのである。厚い手袋なのでマグナムの引き金の孔に指を入れるのにちょっと手間取った。そして静かに引き金を引いた。ジューとかなりの音とともに射出口から勢い良く霧が噴射された。説明文は10秒以上とあるので20秒くらいは噴射した。一度止めたがスズメバチからの反応はなかった。懐中電灯をつけて出入り口を照らしたがスズメバチの出入りはなかった。出入り口の直径は１cm程のものが３cm程に拡大していた。再度同じ長さくらいの時間出入り口に射出した。マグナムを置き、両手で巣をつけ根から外した。何らスズメバチからの反応はなかったので、用意した箱に納め終了した。

翌日後片づけをした。ベランダの床に12匹のスズメバチの死骸が散らばっていた。巣を割ってみるとおよそ35匹が死んでいた。そして蜂巣の中に小さなものから大きなものまで蛹が約50匹収まっていた。これらが孵っていたらこの一族は100匹となり、そうなると巣の大きさも25cmを超え、マグナムでの除去は不可能となり専門業者に頼まなくてはならなくなったであろう。マグナムにそう印刷されていた。朽ち果てた枕木に数匹のスズメバチがたむろしていたのもうなずける。あの蛹が孵れば巣を大きくしなければならず、建材として使っていたのである。スズメバチは死後硬直？のためか腰が曲がり正確に大きさを測るのは困難であるが、16 ～ 22mmくらいであった。ひときわ大きいのが１匹いて、28mmであった。女王蜂なのだろう。これで終了と思うとホッとした。今はお盆に入る少し前であるが、2023年夏は記憶に残る夏となるであろう。例年にない暑さとともに経験のないことをしたことで。

後日談

後日近所の人と世間話をする機会があった。駆除した話をしたところ、ご近所の○○さんの家に数年前スズメバチが大きな巣を作り、業者に３万円で除去してもらったとのことであった。除去してもスズメバチはすぐには立ち去らないとも言っていた。そうなのである。我が家もその後枕木に数匹が留まっていたり、飛び回っているのを見た。市の係員に電話で聞いたところ、近くに別の巣があるとか、離れた所からも飛んでくるからと言われた。スズメバチの行動範囲は半径500ｍとも言っていた。刺激しないようしていたが、ある日トウキビにアブラムシがついているのを発見し、農薬を噴霧した。その作業中私の前に数匹のスズメバチが飛んで来た。すぐに逃げたが時すでに遅く、ズボンの上から大腿を刺されてしまった。熱さを持つ電撃痛である。噴霧剤が流れスズメバチを刺激したのであろう。その後の１週間はつらかった。2023年夏の記憶にさらに一つを加えてしまった。

駆除されたスズメバチと、巣の外被を外し巣盤があり、中にびっしりと幼虫と蛹が詰まっている

コロナ禍のせいで歌手になった話

胆振西部医師会
ひじり在宅クリニック
岡本（おかもと）　拓也（たくや）

歌手としてお金を稼ぐようになる日が来ようとは、まさかである。

コロナ禍でなければやらなかったであろう、とあるカラオケアプリをダウンロードしたのが、約２年半前。

最初はカラオケとして歌うためだけに使っていた。

しばらくして、歌って録音したものを「投稿」するようになった。機能があれば試したくなる。投稿した僕の歌を聴いてくれる人が少しずつ増えて行った。

さらにしばらくすると、そのカラオケアプリに「ライブ配信機能」が加わった。文明の進歩とは凄いもので、アイフォン１台あれば、大袈裟に言えば世界中の人々に向かってライブ配信できる時代が到来したのである。そのカラオケアプリの会社と「ライバー契約」なるものを結び、恐る恐るライブ配信をするようになった。ライブの中身は歌とトークだが、今の「推し文化」を反映してか、少しずつ固定客もつくようになり、今ではほぼ毎日のように夜はライブ配信をしている。“私を待ってる～人がいる～”という百恵ちゃんの歌よろしく全国津々浦々、僕のライブ配信を待っている人が、何十人かではあるが存在しているのである。なんてこった。

しかも、ライブは投げ銭形式であり、僅かではあるが今や収入を得ている。別にお金儲けのためにやっているのではないし、時給に換算すれば数百円という微々たるものだが、それにしてもである。一応、わずかとはいえ、歌手としてお金を稼いでいるわけだ。これまた、なんてこった、である。

そんなわけで、カラオケアプリをダウンロードしなければ、もっとさかのぼるならば、コロナ禍にならなければ、まず出会わなかったであろう老若男女とアイフォン越しに日々交流している。良い面・悪い面、いろいろと副産物もあるし、詳しく書くと長くなるので書かないけれど、絶えずトラブルも発生する。時間も労力も要する。しょぼいとはいえ「二刀流」はシンプルに疲れもする。しかし、それを上回る楽しさと充実感があるのも事実である。だからこそ続けている。

今や副業と化した歌手活動を、ファン（2023年９月12日現在、フォロワー数3,348人）の方々と共に日々楽しんでいる今日この頃である。人生は何が待っているかわからない。良いこと悪いこと含め、なんてこったいの連続である。でも、だからこそ面白い。

蛇足ながら誤解なきように慌てて一言付け加えるが、本業である医者の仕事も全力で日夜尽力しております。

５年前の再スタートに思う

札幌市医師会
下田ひふ科耳鼻咽喉科クリニック
下田（しもだ）　和夫（かずお）

2018年９月と聞いて思い浮かぶものは？との問いに、道民の多くが、北海道胆振東部地震とブラックアウトと答えるのではないでしょうか。

５年前、インフラが整っている生活のありがたみ、防災の重要性を再認識した数日間を過ごした多くの方は、通常の生活へ戻っていったことと思います。もちろん、被災して暮らしが一変し、日常が戻っていない方がいらっしゃることも決して忘れてはいけない現実です。

私の生活も普段通りに戻るはずだったのですが、その１週間後に試練が訪れました。

ブラックアウトの影響がとても少なかった（停電当日の夜には電気が復旧した）地域にある自分のクリニックで火災が起きたのです。幸いにも、近隣の住宅への延焼は避けられましたが、現場に駆けつけてしばらくは「茫然自失」、ただ燃え上がる炎を見つめているばかりでした。

結果的には翌年１月から診療再開を果たせましたが、再建しようと決心するまでの数日間の長かったこと。しかし、そのわずかな時間に出会った周囲の方々が私の背中を押してくれたのだと思います。

火災の翌日、鎮火したクリニックを眺めながら「これはできるな」とつぶやいた家主さん（うちは賃貸です）、診療があるにもかかわらず駆けつけてくださった同区内クリニックの院長ご夫妻、現場検証の間中（１日かかりました）気にかけてくれた薬局の方々、早朝から駆けつけてくれた卸会社の担当者、休診の間のスタッフを雇用してくださった医療法人の理事長や新規開業したばかりのクリニックの院長、そして煤だらけになりながら、後片付けに毎日出てくれたスタッフ等々。

あれから５年。コロナ禍という未曾有の数年も過ごしてまいりましたが、あの火災からの再スタートができたのですから、これからも何とかやっていけるのでは、と考えることにしています。

最後に、突然の休診からの４か月間、患者さんの要望に応えてお薬の処方をしてくださった近隣の病院、クリニック関係者の皆様、再開を信じて待っていてくださった患者さん、本当にありがとうございました。これからもこの地で、町医者として皆様と共に過ごしていきたいと考えいます。よろしくお願い申し上げます。

2023
最高？の夏休み

帯広市医師会
十勝勤医協帯広病院
深町（ふかまち）　知博（ともひろ）

毎年、夏休みプランには頭を悩ますが、今年は特に困った。子供たちが小さい頃は、ひたすらキャンプへ行っていたが、子供たちがだんだん大きくなるにつれ、キャンプ労働？が毛嫌いされ、やれアシナガグモが嫌だの何だのと理由をつけられ、しばらく家族キャンプから遠のいていた。そうであればと、ここ数年は奮発してキャンピングカーをレンタルして出かけたが、今年はそのキャンピングカーも暑くて嫌だと言い出した(気持ち的には「言い出しやがった」)。今年は犬連れ、しかも大型犬（シベリアンハスキーとバーニーズマウンテンドッグのミックス、メス、2022年７月12日生）でもあり、大型犬と宿泊可能なロッジ、ホテルなど何度もネット中心に探してみたが、ものすごく高価？（１泊１人＞３万円など）のところは散見されたが、大人４人分で数泊となると予算外として却下した。

私は毎年お盆の週に土、日、祝日、有休などを合わせて10日前後夏休みを取らせてもらっているが、今年は８月５日（土）から15日（火）まで11日間休ませてもらった。これだけまとめて休みが取れるのは年に一度しかないので、当然、楽しく有意義に過ごしたい。毎年、３～５日は同じところに宿泊するようにしていて、例年宿泊先やキャンピングカーの手配は春先から予約していたが、先の理由でどこにも犬連れで泊まれるところが見つからず、夏休み前１か月を切った時点で、予定は最初の３日間しか決まっていなかった。その３日間は、父親の死去(2006年) 後、年に一度の「兄弟のつどい」(「みんな仲良く。年に１度くらい集まれ」との父親の遺言によるものである）を取り行なった。最近は、母親のいる帯広に集まっている。私は男ばかりの３人兄弟で、１つ下の弟は新潟で矯正歯科を開業している。９歳下の弟は苫小牧で主にリハビリ医として働いている。それぞれ忙しいので、半年くらい前から予定を調整して集まった。新潟組は２歳、５歳を連れた甥っ子家族を含めて総勢７名、苫小牧組は家族４人が集合。実は、２年前に母親の「米寿」を兄弟以外に親戚も含めて大々的にしようと計画を練っていたのだが、コロナで断念した。今年は「白寿」だが、コロナが終息したわけではないので、どうしたもんかと悩んでいた。入所している施設に相談したところ、外出、外食禁にしていると言われ、結局、弟たちは十勝川温泉に泊まらせ、３日間、毎日、皆で面会（１回20分）に施設に訪れ、最終日、母親の誕生日に花束をあげて散会した。母親は相当認知症が進んできているが、毎回面会の別れぎわに、「(皆に会えて）こんな嬉しいことはない。生きていて本当に良かった」と言ってくれたことがとても印象的だった。

ここで突然話しは変わるが、私の今の趣味は風景写真を撮ることで、ちょうど、父親が死んだ年から始めた。今回、兄弟たちが集まるに当たって、温泉卓球以外に何か楽しい企画はないかと考えていたところ、閃いた。その名も「写真神経衰弱」。同じ写真をＬ版に２枚印刷して、トランプの神経衰弱と同じルールで同じ写真をめくったらその写真をもらえるというルールだ。風景写真のみならず、今まで撮り溜めてきた子供たちの小さい頃の変顔や、５年前の父親の法事の時の今回集まった弟たち家族のメンバーの写真も織り交ぜて、２日間で、おそらく100組近くの写真を提供した。これは、爆笑の渦で大好評だった。うちの老健施設でお年寄りたちにも楽しんでもらえないか思案中だ。この３日間で、もうひとつ初体験をした。それは、ばんえい競馬だ。苫小牧の家族が、今回の集まりとは別に母親に会いに帯広に来た時に、ばんえい競馬を楽しんでいったみたいなので教えてもらった。時間がタイトで１レースのみだったが、単勝ははずれ、複勝は当たり、2,000円出資して1,100円戻ってきた。息子は単、複勝両方とも外れ、もう一生やらないだろうと言っていた。ちなみにギャンブルが昔から強い次男は人気があまり高くなかった９番に単勝をかけて当たったようだ。稼ぎ高は聞いていない。「お袋が90歳だから、最初から９にかけようと思っていた」と。甥の息子（５歳）は５年ぶりの再会（今回の「写真神経衰弱」では赤ん坊として登場）と娘（２歳。初顔合わせ）も超めんこく、最高に楽しい３日間であった。

さて、話は戻るが、この３日間以外予定が決まらず、家の片付けでもダラダラしながら過ごすしかないかと半ば諦めかけていた夏休み前１か月を切ったある日、「え～い、ままよ。ダメもとでかけてみるか」と阿寒の鶴雅系列の大型犬OKの宿泊施設に電話してみた（ここは高くて敬遠していたところだった)。なんと、８月８日（兄弟たちは７日に帰った）から２泊３日のみ空いているという。しかも、１日１人２万円弱（朝食のみ。以前は夕食もついていたので優に３万円超えだった)。即決した。妻に褒められ喜ばれた（それだけでもOKか？)。10日に阿寒から帰宅後、８月12日には美瑛でプロの写真家（中西敏貴氏）の初プライベートレッスン（当日AM ４時集合の為、美瑛に前泊。レッスン代3.5万円／６ｈ）を受け、前田真三賞挑戦に大変示唆的な時間を過ごすことができた。13日夜は親しい友人家族と我が家の３Ｆ屋上で食事をしながら勝毎花火大会を堪能。15日はAM ３時30分出発（14時帰宅）で研修医とともに十勝管内撮影行と、終わってみれば、とても充実した最高の夏休みであった。

三大秘湖ライン

根室市外三郡医師会
町立別海病院
山内　修

日本地図を頻繁に見るようになったのは、私が別海に来てからです。年に一回、家族で道外旅行をしているので、地図を見る機会が多くなりました。

地図を見ると、マサカリの形の下北半島、左の親指を90度曲げたような能登半島、と一般的にいわれています。種子島はタネの形。対馬は私見ですが、細胞分裂状態と認識しています。佐賀県唐津市の神集島は勾玉状で、まさに神業です。

群馬県の輪郭を見ると、エゾモモンガが滑空している形です。茨城県龍ケ崎市の輪郭は、クラゲやカブトガニに見えます。ちなみにカブトガニ博物館は岡山県笠岡市にあり、オスとメスが繋がっていたりして非常に面白い施設でした。

三つ以上の主要地点が、一定の線上に並ぶのは稀有なことです。小説では松本清張の「Dの複合」が有名です。高田嵩史の小説「神の時空　京の天命」の中には、松島・天橋立・厳島の景勝地が直線で結ばれる図が示されています。また、さらに驚きは氏の「QED　神器封殺」です。京都を中心にして熱田神宮の距離で円を描くと、その円周上に伊勢神宮・伊弉諾神宮（淡路島）・伊和神社（兵庫県）・伊奈波神社（岐阜県）があるのです。高田氏の小説には、他にもいろいろな線上に並ぶ神社などが出てくるので、興味のある方は読んでみてください。

NHKの歴史探偵では、①北極星（神の星）→日光東照宮→江戸城が一直線。②久能山東照宮→富士山（不死山）→日光東照宮も一直線。①と②が交わる点が日光東照宮（2021年6月30日放送）。日光が重要な地点だったようです。いや～、久能山東照宮への1159階段を登るのは過酷で、本当に「いちいちご苦労さん」でした。しかし、そこの御守りは印籠形で、私のお宝の一つになっています。

さて、北海道には秘境の湖が沢山あります。その中で三大秘湖は、オンネトーと東雲湖そしてオコタンペ湖とのこと。地図を見ていると、これら三つの湖が一直線上にあることを発見しました。誰かこれを使って、推理小説を書いてみてください。

この直線を西に伸ばすと、真駒内ダム湖（せたな町）に当たります。もしかして、真駒内ダムは「三大秘湖ライン」の延長上に、意図して造ったのかもしれません。

函館の皮膚科事情

函館市医師会
ひらた皮フ科クリニック
平田　忍

初めに、函館皮膚科医会は、函館とその近郊の皮膚科を専門としている医師が、参加している会です。昭和58年頃に皮膚科と泌尿器科に分かれ現在に、至っております。

現在私が、前会長であって矢島千穂先生の跡を継ぎ、４代目の会長として、約10年が経過しました。コロナ禍のため、皆様少し外来患者さんが減少したことがありましたが、今は、元にもどってきている様子です。

最近の皮膚科雑誌をみていますと、コロナのため、マスク皮膚炎という新しい病名もでてきております。道南の人口は、約46万人でありますが、遠くは北檜山町、倶知安町、寿都町、長万部町から、また、青森県の下北地方（むつ市、大間など）からフェリーに乗って函館のクリニック、病院に通院されております。病院の皮膚科外来としては、６か所、クリニックとしては、７か所です。

本年５月に２クリニックが閉院し、１クリニックが休院いたしました。その後は、各クリニック、病院の皮膚科外来に患者さんが殺到しております。そのため、新患の受付を中止しているクリニックもあるのが現状です。これでは、医師、医療従事者の疲弊が嫌々、増加することが考えられます。

函館の皮膚科医勢も、ピンチを迎えています。

当所は、函館山の夜景を含め、五稜郭公園の桜、つつじ、恵山のつつじなどの景観も素晴らしく、食も寿司屋さんも多く、美味しい、いろいろな店があります。気候も穏やかであり、住みやすい所です。ただし、今年は、35度と函館気象台開設以来、初めての暑い夏でした。やはりクーラーが必要です。

この文章をお読みになり、函館での開業を考える方がいらっしゃれば、幸いです。

おでんお国自慢

函館市医師会
水関（みずせき）　清（きよし）

秋の日が駆け足をするようにして短くなり、夕暮れ時に寒さが募ると、コンビニの店先におでんが並ぶ。自動ドアの開閉とともに外に漏れ出す香りに誘われて、思わず店内に入り、思い思いの品を注文してイートインスペースで小休止し、さあ、また仕事、という風情で店を離れる方の姿も見かける。

都内で開かれた学会のシンポジストに指名されたことがある。プログラム上は、学会２日目の午前９時からの３時間をそっくりあてて、当時、学会小委員会で審議中であった診断基準の試案をたたき台にして議論を深める、という体裁であった。シンポジストは私を含めて５名で、本番開始前に１時間の打合せ枠が確保されていたが、経験上午前８時からの打合せの出席率は思わしくなく、かといってぶっつけ本番の議論では、その落ち着き先に不安が多い。

学会初日のどこかで予備の打合せをしようと思い、旧知の２人に声を掛けてみたが、一人は初日の夜に岡山から飛行機で都内に到着予定、長野県飯田市内の勤務医であるもう一人も、都内に着くのは夜になる見込みとのこと。当日の早朝に比べれば、しっかり話ができそうなので、到着後にどこかで、ということで急浮上した待ち合わせ場所が、学会場近くのホテル内のコンビニであった。

二人とも、鼻先を真っ赤にして、白い息を吐きながら、店の前までやって来た。聞けば、霙になりそうな寒さだったという。早速店内に入ると、レジ脇にはおでんが湯気を立てていた。大根、卵、牛スジ、焼き豆腐、ガンモドキまでは３人とも共通だったが、一人が、焼きちくわ（ぼたん）と、ちくわ形をした練り製品のようなものを皿に入れていた。イートインスペースで、熱いお汁に浸かったおでんで一息入れたところで、一人だけ異なるおでんダネの話になった。それぞれ、焼きちくわ（ぼたん）と、ちくわぶ、と言うそうだ。これに「ネギだれ」があったら最高なんだけど、とも付け加えた。温まったところで、ホテルのロビーに場を移して、翌日の準備となる話し合いをし、時計の針が日付を跨ぐ頃に解散した。

打合せの大半が終わったという安堵感のためか、自室に入った途端に、おでんダネのことが気になってきた。翌朝に支障のない範囲でと、自分に言い訳するようにして調べてみると、意外なことが分かった。焼きちくわ（ぼたん）は、スケソウダラ以外の魚種も材料にしたもので、明治時代の気仙沼発祥。「ぼたん模様」と呼ばれる膨らんだ焼き目は、薄い皮が全周を取り囲む焼きちくわ（全焼き）とは、おつゆの染み込みが違うとのこと。「ちくわぶ（竹輪麩）」は小麦粉をこねて茹で上げたもので、おでんの中で汁を吸う日々を重ねるにつれて、他のおでんダネの追随を許さない食感と味わいが出るとのことで、その道の専門家が蘊蓄を傾けた記事が続々とでてきた。「ネギだれ」に行ったら、飯田市に伝わる食文化として、これまた豊富な資料が出てきた。要約すると、市内の飲食店の常連客に店主が、醤油などで味を調えた出汁に刻んだネギを加えたものをのせたおでんを提供したことがはじまりで、美味しいと絶賛され、今では市内に広く普及しているとのこと。

翌日のシンポジウムは無事終了し、長野から来た一人は、仕事の都合で、これから飯田に戻るバスが出る新宿に向かうという。別れ際に「ネギだれ」のことを耳元でささやくと、うれしそうな表情をして、「信州飯田のねぎだれ」の名の瓶詰が通販サイトでも入手可能だが、アツアツのおでんに、刻みたてのネギを浮かせた出し汁を、たっぷりかけていただくのが一番、「是非食べに来て。飯田線で」という、鉄道好きの私の興味をもくすぐる返事だった。

作家・向田邦子は、思い出というものの本質を、ねずみ花火に託して、こう語っている。

「いったん火をつけると、不意に足許で小さく火を吹き上げ、思いもかけないところへ飛んでいって爆ぜ、人をびっくりさせる。」

そのねずみ花火のように、小学生時代の夏のプール通いのことが、思い出の海の中からぽっかりと浮かんできた。友達と誘い合わせて、プール通いをしたある日の帰り道。駄菓子屋の店先で、大鍋に、大根・ジャガイモ・ちくわ・蒟蒻・卵・ごぼう天などを、ひと串ずつ刺したおでんダネが、湯気を上げているのである。プールで冷えた身体を温めようとして、一人が、大根・卵・蒟蒻・ちくわ・ごぼう天を注文した。応対したおばちゃんが、厚手のビニール袋を２枚重ねにして、その中に注文品を入れてお汁を注ぎ、５本の串をひとまとめにした根元の所でビニール袋を、くるくるっと丸めて渡してくれた。近くの公園で、一人一本ずつおでんダネを食べ、残ったお汁は代金を払った子が、袋の口を丸めながら飲んだが、出る勢いの調節は難しいようで、プール上がりの胸元を汚してしまった。

おでん注文、３回目の時の出来事だったろうか。いつものように手分けしておでんダネを分けあっていたが、ふとしたことで、タネの串が２枚のビニール袋を貫いてしまい、お汁が漏れ出した。とっさのことで口を付けて飲んだが、口を離してひと息入れようとすると、袋の口からお汁が出てくる。むしろ、袋の穴から放物線を描いて落ちてくるお汁を、口で受け止めたほうが面白そうだし、慣れれば易しそうだ。

４回目の注文では、一人ずつ別々のビニール袋におでんダネとお汁を入れてもらい、それぞれが３回目の出来事を参考に、お汁飲みに挑戦した。おでんダネを食べる順序も考えた。順番の真ん中に、汁だくの大根でのどを潤し、慎重に食べないとせき込むこともある卵を最後にして、ビニール袋に開ける穴は、刺す串の数と位置とで調整したのである。

全員がむせることなくおでんを完食し、胸元も汚さなかったのである。

お互いがそれぞれの快挙を見届けた翌日、その夏のおでん営業は終了になった。

私の趣味「ファゴット」

江別医師会
スウェーデンヒルズ耳鼻咽喉科
東山（ひがしやま）　佳澄（かすみ）

はじめまして、令和４年12月より石狩郡当別町でスウェーデンヒルズ耳鼻咽喉科を開業しました、東山と申します。

平成６年に高知医科大学（現高知大学）を卒業後、高知県内の病院で勤務、平成16年より横浜で東山耳鼻咽喉科医院を継承、このたび当別町の大自然とスウェーデンヒルズに惚れて移住を決心した次第です。

私の「マイ・ホビー」は、ゴルフの他、ファゴットを演奏することです。ファゴットはご存じでない方もいらっしゃると思いますが、オーケストラでは必須の楽器になります。「ファゴット」はドイツ語で「薪の束」という意味から来ており、全長2.6mにもなる１本の長い管を途中で折りたたみ、２本の管を束ねた姿（**写真１**）で演奏します。客席から見ると煙突のようにも見えるようです（**写真２**）。歴史は大変古く、16世紀ごろにその前身の「ドゥルシアン」が用いられていたそうで、19世紀頃にはドイツ式「ファゴット」とフランス式「バソン」に分かれて以降それぞれが活躍しています。ファゴットやバソンが主役となる協奏曲も多く作られており、現在でも演奏会で取り上げられることもあるので、ぜひ暖かい音色に触れていただければ嬉しいです。

ファゴットはオーケストラの中では主に木管の低音部を担っており「縁の下の力持ち」的な役割を持っています。普段は他の楽器の演奏をもり立ててあげることが多いのですが、いざ主旋律やソロの部分になると、全身全霊ぶつけてゆくという頑張り屋さんでもあり、奏者は普段の私生活や職場での役割を含め、そういう性格になってゆく方が多いようです。

ファゴットの音の出る部分はリードといって、葦（あし）の茎の部分を丸めて先端を薄くしたものを２枚重ねて制作するのですが、このリードのできの善し悪しが音色や演奏のしやすさに大変影響するため、アマチュア演奏者の場合、自分の好みに合った市販のリードを探し回ることになります。手先の器用な人は自分で材料を購入して作るのですが、私も手術を含め、そういう手作業が大好きで今までに数え切れないくらいリードを自作してきました。しかしこれが大変奥の深い作業で、自分の師事している先生に自作リードを試していただくたびに「リードを作る時間があったらそれを練習時間に充てなさい」とダメ出しをされ笑われることも多々・・・

横浜にいたときはいくつか市民オーケストラに所属して毎週のように楽器の演奏をして楽しんでいましたが、こちらに移住してからは開業の準備などに追われ、残念ながらオーケストラ活動ができておりません。今後は小さな編成のアンサンブルへの参加から少しずつ演奏の場を見つけてゆければと考えております。北海道医師会には楽器演奏をされる先生も多くいらっしゃると伺っております。もしファゴットと演奏がしたい、ファゴットが足りないという場面がございましたら、ご連絡をいただければ嬉しいです。

50半ばにして新天地を新しい地元として、地域の方々のために頑張ってまいる所存ですので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

写真１（本人（右））

写真２

将棋とAIと新型コロナ

苫小牧市医師会
勤医協苫小牧病院
松本（まつもと）　巧（たくみ）

将棋棋士の藤井聡太７冠（本稿執筆中の2023年９月現在：竜王・名人・王位・叡王・棋王・王将・棋聖）が2016年10月１日に歴代最年少の14歳２か月でプロデビューしてもうすぐまる７年となる（本稿執筆中の2023年９月現在）。プロ公式戦初戦の相手は加藤一二三（愛称ひふみん：当時76歳。77歳５か月で引退規定に基づき引退。歴代最年長）で、62歳６か月の年齢差はプロ公式戦史上最大だった。将棋棋士の世界は厳しく、満60歳を過ぎると規定の成績を維持できなければ引退となるが、当時76歳まで現役棋士でいること自体が驚きだった。この歴代最年少vs最年長の対決はおそらくこの先何十年も実現しないだろう。藤井は2017年６月までデビュー初戦から無敗の29連勝を飾り、これまた30年ぶりに最多連勝記録を塗り替えた。その年にAbema TV将棋チャンネルで企画された「炎の七番勝負」では、羽生善治をはじめとする実力者７名と対局し、中学生の藤井は６勝１敗で大きく勝ち越した。ここまでだけでも小説や映画の脚本としては出来過ぎで、あり得ないレベルと思うが、その後も藤井は史上最年少記録を次々と塗り替えた。本稿執筆現在、藤井は永瀬拓矢王座への挑戦権を獲得し、史上初の全８冠独占を目指している。羽生善治が1996年当時７タイトルしかなかった時代に７冠独占を達成してから約30年ぶりとなる。しかも一般棋戦（NHK杯　朝日杯　銀河戦　将棋日本シリーズ）も全て制して史上初の一般棋戦グランドスラムを達成しており、同一年度内で８大タイトルも全冠制覇するとなると、もはや人間業とは思えない。

プロ棋士がAI将棋ソフトには勝てないと認識されたのは2017年ごろで、叡王戦優勝者の佐藤天彦（当時：名人）が将棋AIソフトPonanzaに２連敗した。その後プロ棋士たちは最善手の研究にAIソフトを多用するようになった。藤井は早くからAIソフトを利用しており、超高性能のプロセッサを搭載した高額な自作パソコンを使用している。去年はプロセッサメーカーのAMD Japanが演算能力において天才的頭脳の象徴とも言える藤井聡太を起用してCMを制作し、200万円相当とも噂されるハイエンドパソコンを贈呈したことが話題になった。

2016年から2017年にかけて、竜王戦挑戦権を得ていたトップ棋士が対局中にスマートフォンを使って将棋AIソフトを不正利用した疑いをかけられるという騒動があった。調査の結果、当該棋士の潔白が認められ名誉は回復された一方、騒動の責任をとって日本将棋連盟会長らの辞任や解任に発展し、将棋界に暗い影を落とした。ちょうどその時期に登場した藤井が空前絶後と思われる活躍を見せ将棋界の雰囲気は一新された。

その後ほどなくしてコロナ禍が訪れた。将棋は相手から獲得した駒を使えるので、手を介して相手と接触する機会は多い。対局中はマスクの上から口元に手を当てたりもするし、顔と顔の距離はしばしば将棋盤の直径ほどまでに近づく。対局時間は各棋戦に定められた持ち時間にもよるが、名人を目指す順位戦だと１人６時間、合わせて12時間で、終局は深夜に及んで日が変わることも珍しくない。対戦相手からの感染リスクもそれなりにあると思う。

規定により、新型コロナに感染した棋士は、棋戦の進行上、延期措置が困難な場合は不戦敗となる。これにより対局せずして負ける棋士が何人も現れた。健康管理も勝負のうちかもしれないが、これだけ感染力が強いと誰が感染しても不思議ではなく、運次第だ。

緊急事態宣言が出た頃は各棋戦の延期・中断が相次いだ。対局中にはマスク着用が義務付けられた。ご本人にとっては決して笑いごとではないが、集中するあまり、うっかりマスクを外したまま約１時間将棋を指し続けた元名人が対局相手から指摘された時点で反則負けとなるなどの珍事も起きた。その後、新型コロナウイルスの分類が５類へと移行する中でマスク着用は任意となった。

中学生の頃、父が友人から未完成の将棋盤（木は桂）をもらってきた。たしか厚さ６寸で、木目が綺麗だったが１か所大きな節が付いていたので商品にならなかったのだろう。天板はツルツルでマス目がなく、脚もついていなかった。

ひっくり返すと裏面の中心には四角形の窪みの中にピラミッド型の四角錐が埋め込まれたような彫りがあった。父はこれを、昔は殿様の前で対局する御前将棋というものがあり、反則を犯した棋士を打首にして、逆さまにした将棋盤に首を立てるために作られたものだと説明した。嘘か本当かわからないまま、天板にノコギリで81マスの彫りを入れ（職人は刀で彫る）、墨入れをして自家製の将棋盤を完成させた。脚はなし。

中学生の頃、その将棋盤でアマ初段の父と徹夜で将棋をしたことがある。何度やっても勝てず、しつこく「もう一局」としているうちに明け方になってしまった。結局勝てたのは父が居眠りを繰り返しながら対局した最後の一局だった。

コロナ禍の別離

旭川市医師会
森産科婦人科病院
日髙　康弘（ひだか　やすひろ）

父の一周忌が終わった。来月には納骨を控えている。享年81歳。父は48歳で脳出血による片麻痺となった母と二人で暮らしていたが、父も63歳で認知症となり、16年前から二人で介護施設に入居してもらっていた。

父は誤嚥性肺炎で３週間入院治療を受け、リハビリのために別の病院へ転院。リハビリに励んでいたようだが２週間後に急逝。夜の部屋回りで心肺停止の状態で発見され、心肺蘇生には反応しなかった。主治医だった同期の医師が死後CTを撮ってくれた。腸管穿孔による敗血症性ショックの診断だった。父の表情から最後は苦しまず眠るように逝ったようだった。コロナ発生からの２年半は介護施設の面会も制限され、差し入れを持っていった時に顔を合わせる程度しか会っていなかった。最後に会ったのは転院で介護タクシーで移動した時の数分だけだった。

父は元気な認知症だった。人の言うことを聞かず困ることが多々あったが、介護施設の入居者の中ではかなり若い方であり、夏は畑や花壇の手入れ、冬は除雪作業させてもらっていた。若い頃から体を使う仕事をしてきた人なので、作業をさせてもらうことで認知症や老化防止には良かったようだ。私たちに口では「こき使われる！」と文句を言いながらも仕事ができることに満足していて充実した日々を送っていたようだった。コロナ禍になり感染対策で入居者が屋外に出ることが禁止され父の作業もできなくなった。代わりに施設内の清掃作業を始めた。廊下を掃いたりしていたが、下を向いての作業なので腰が曲がってしまった。面会もできなくなっていた時期なので、１年くらいで90度近く腰が曲がってしまっていたのを知って驚いた。屋外作業をしていた時ほど仕事もないため認知症は悪化してきて、そんな中、誤嚥性肺炎となり緊急入院となった。コロナで面会はできないため退院・転院が決まるまで病状は全く分からずにいた。

コロナ禍でなければもっと長生きできて、屋外作業を続けられて充実した日々を生きられたかもしれない。入院して面会もできず寂しい思いをさせただろう。私も父にもう少し何かできたかもしれない。残された母は一人介護施設で過ごしている。今も面会には制限があるが、週末には差し入れを持って行き、母との残り少ない時間を悔いのないよう過ごしたいと日々考えを巡らせている。

揺らぐ内科診療のサステナビリティ

北海道大学医師会
北海道大学病院
石森　直樹（いしもり　なおき）

2018年春に「新」専門医制度が導入され、早くも５年が経過した。導入前には時の厚生労働大臣から制度運用に関する注文が出され、波乱含みの展開であった。当時、本制度を統括する日本専門医機構は、「新制度を運用しながら問題点を洗い出し、適宜修正しながら、より良い制度を作り上げてゆく…」と説明がなされていたが、現状はどうであろうか？

新制度導入によって内科・外科など19基本領域の専門研修は、到達目標と研修プロセスが厳密に設定される「プログラム制」となった。内科専門医の取得を目指す専攻医は、３～４年の研修期間で、直接担当した症例の中から内科学会が定める方法（J-OSLERと呼ばれる研修実績の登録・評価WEBシステム）を用い、少なくとも160症例の概略を登録し、そのうち29症例は詳細な考察も加えた病歴要約を作成し、最終的に外部査読者より承認を受けなければならない。

今回、新制度下での研修実態を把握するため、当院内科専門研修プログラム修了者を対象として、アンケート調査を実施した。詳細については別稿[1,2]に譲るが、全修了者の半数の44名から回答を得た。その結果、WEBシステム上で症例登録に要した時間は１症例あたり（中央値）30分、さらに病歴要約の作成には１症例あたり（中央値）300分が費やされ、前述の研修修了要件を満たすには、実に225時間（中央値）が費やされている実態が明らかになった。

新制度導入の目的として、幅広い臨床経験にもとづく「より良い臨床医の育成」が掲げられていたが、修了要件を満たすためデスクワークに多くの時間が割かれ、ベッドサイド診療にマイナスの影響が生じていることは否めない。新制度導入後の内科専攻医数は全国的に概ね横ばいで推移しているが、首都圏で増加している一方、地方では減少傾向にある。特に北海道ではその傾向が顕著で、2023年度に新規採用した内科専攻医は全道で70名と前年度にくらべ19名の減少である。このトレンドには様々な要因が複雑に絡んでいると思われるが、内科診療のサステナビリティを維持してゆくためには、危機的な状況に現在直面していることを認識し、様々な場面で議論を深めてゆくことが今まさに求められているのではないだろうか。

１）小野澤真弘、石森直樹、豊嶋崇徳　内科専門医登録システムJ-OSLERによる症例登録の実態調査　第55回日本医学教育学会大会2023．７．20（長崎）
２）メディカルノート　2023．９．４公開　https://medicalnote.jp/nj_articles/230829-001-WA